

いっしょに遊ぼう。

城陽市立今池小学校 五年
師橋ひより

みなさんは、特別支援学校に通っている子ども達について知っていますか。障害者週間とは、障害のある人達について、関心をもとうという週です。

私の兄は、特別支援学校に通っています。知的障害のある自閉症児です。好きなものは乗り物やキラキラした物です。うれしい時はニコニコしながら「うー♪」と言います。反対に、おこっているときは、歯をくいしばりながら「うー！」と言います。私は、兄の顔を見なくても、兄がどんな気持ちの「うー」なのか聞き分けることができます。

ある日、私の学校の先生が兄や兄の学校の友達と交流に来ることを教えてくれました。私は、心の中で「いやだなあ。友達になんて言われるだろう。」と不安に思いました。友達に「変だね。」と言われたことがあるからです。でもそれは、私だけの思いこみでした。みんなが「ひよりのお兄ちゃんて、足は速い？」などきいてくれて、うれしくなりました。私は、「お兄ちゃん、走るの好きだよ。」と教えてあげ

ました。先生からも、「お兄ちゃんの好きな乗り物はなに？」と聞かれ、船が好きだということを伝えました。みんな、お兄ちゃんが来ることを楽しみにしてくれているんだなあと感じました。

そして、交流会当日もうれしいことがあったのです。チームでゲームをするとき、友達の一人が「こっちはよー。」と兄をさそってくれたのです。私は、うれしくて、うれしくてたまりませんでした。初めて会った兄に、声をかけてくれて有りがたいなあと感じました。

しつぽ取りおにごっこでは、私たちがおにになり、兄たちは走ってにげます。そのときの兄の表情がとても楽しそうでした。学校の友達も楽しそうに追いかけていました。

後日、私の学校の参観があり、母といっしょに兄も来ました。そのときに、「ひよりのお兄ちゃん、久しぶり！」と友達が兄の目の前に立ち、声をかけてくれました。けれど自閉症の兄は、目を合わせることがむずかしく、顔をよけて、

その友達よりも向こうを見ていました。でも、その友達も兄と目を合わせようと何度も兄の顔の目の前に、自分の顔をもつてきては、チャレンジしていました。母は、そのことを今でも何度も話すので、友達のほうから兄のそばにきて声をかけてくれたことが本当にうれしかったのだと思います。交流会という特別支援学校の子どもたちと関わる機会があったことで、兄を「友達」だと思ってくれているのだと感じました。

兄のまわりには、兄のことを理解し、兄と関わろうとしてくれる人が本当にたくさんいます。そのおかげで、いろんなイベントや行事に家族で参加するようになりました。兄は人とのつながりに恵まれていると、母はいつも言っています。私も、兄のように、たくさんの人に支えてもらいながら、毎日楽しく過ごせることができる人が増えていくといいなあと思います。

本当は、兄がいることで今でもがまんすることはあります。でも、兄がいることで、この世界にはいろんな人がいるということを知りました。そして、自分から積極的に関わることができるように思います。この先、私と同じ思いの人がこの世界にもっともつと増えていくといいなあと思っています。

全部理解して欲しいと思いません。
しかし、知って欲しいです。

氷川町及び八代市中学校組合立氷川中学校二年

小田莉子

「何でお前笑っているの。ヤバッ。」や「授業中にそれ(足が動いてしまう)止めてくれない。集中できないから。」など言われたことがあります。直す努力をしています。今ひとつ空気を読むことが苦手です。また、体のどこかが自然と動きます。他にも、人とは違った感覚があり、よく指摘を受けます。

学習では、国語と数学が他の教科よりも分かりませんが、運動も、言われた通りに動かそうとしても思うように動かせず、姿勢も悪いです。それに、大きな音が嫌で、特に花火の音や運動会のピストルの音、爆竹の音が異常に怖く感じました。

私は、保育園の頃からいろいろと言われてきましたが、年齢が上がるに連れて周りから厳しい言葉をかけられることが増えました。自分を守ろうとして言葉や態度が悪くなってきたと思います。同時に、自分も責めるようにもなり「私なんか必要か?」と思うことも。

私も成長したのか今ではそれを、感じます。弟は、まだのようです。私の母は、学校の先生をしています。音楽の先生から、特別支援学級の先生をするようになりました。きっと私がきっかけです。

家では、よく勉強したり生徒やその家族についての支援方法を考えたりしています。そして、保護者の方に「迷惑をかけますと言わないでください。迷惑だと思っと思っていますよ。私も同じ悩みをもつ同士、一緒に頑張っていきたいですね。」のような言葉を伝えていきます。逆に、私のことになると「ご迷惑をおかけしてすみません。」と言っています。そのせいか、二つの立場で板挟みのようになると、「特性は個性だと分かってももらえないのか。」と、愚痴をこぼす母がいます。私のような人にとって、母のような存在は、救われます。

私のことを全部理解して欲しいとは思いません。しかし、見た目で分からない障がいがあることを知って欲しいです。治療をして軽減できても、治るものではありません。どんなに一生懸命に頑張っても悔しいですがすぐに成果は出ません。だからと言って、特別扱いをして欲しいのではありません。具体的に教えて欲しいだけです。何がだめだったのか振り返りながら直す努力をしていきます。冷たい言い方や軽蔑するような言い方にも慣れていますが、や

いわゆる、私は「発達障がい」です。「自閉症スペクトラム症」と診断されました。他にも「注意欠如・多動症」「学習障害」「発達性協調運動症」の疑いもあります。たくさん障がいをもって生まれたことに、「かわいそう。」と思う人も多いかもしれません。

できない私を、ゆつくりと成長する私を、母は理解してくれています。だからと言って、他のお母さんのように優しい言葉でなぐさめたり、甘やかしたりしません。「人のことをとやかく言う前に、自分はどうなの?」や「自分がどう生きたいのかしっかりと自分で考えなさい。」と言うような母です。ただ、私にだけ厳しくしているわけではなく、弟にも同じです。また、母の仕事で関わった人たちも同様のようです。それに、母自身も自分に厳しい人です。でも、人には親身になって手を差し伸べる人です。母をしたう人にとって、表面上の優しい言葉よりも、実際に行動する母の姿を見ているので、厳しさの裏に込められた愛情を感じま

はり傷つきます。そして、防衛本能が働くのか、反抗的になってしまう。

障がいの有無に関わらず、一人ひとりの個性を自分のものさしで否定したり、皆と同じような考えを押しつけたりするのは違います。花がそれぞれ色と形に特徴があるように、個性にも特徴があります。カラフルに咲き乱れる花が綺麗のように、カラフルを認め合える世界も、きっと綺麗なはず。バリアを外した、その様な世界に興味をもつてみませんか。

気づきから生まれる 誰もが暮らしやすい社会

静岡県立掛川東高等学校二年

佐野 夢果

「夢ちゃんは夢ちゃんだよ。」
友達の何気ない一言だった。しかし私にはこの言葉が本当に嬉しくてたまらなかったのだ。

私は生まれつき障害があり、車いすで日常生活を送る車いすユーザーだ。そんな私は、小中、そして現在の高校に至るまで、普通学級で学校生活を送ってきた。障害がある生徒は私一人。

そんな中での学校生活は、私にたくさんのお会いや気づきをもたらしてくれた。私の小学校は全学年一クラスの小さな学校で、クラス替えもなく、六年間同じクラスメイト。そんな六年間を共にしたクラスメイトは、いつも自然と私に手を差し伸べてくれた。学校行事ではどうすれば、私が参加できるのかを、周りの友達がいっしょになって考えてくれたし、先生もたくさん工夫やアイデアでどうしたら私が参加できるかを考えてくれた。例えば授業で川に行くことがあった時、先生が濡れてもいいようにと防災用

の車いすを借りてくれたこともあった。授業の一環で野菜を育てた時も、畑に車いすで行けるようにとクラスの友達が、ダンボールを敷いてくれた。今回の募集テーマになっている「心の輪」は、そんな学校生活でいつも私の周りに広がっていたように思う。そんなクラスメイトや先生達とだったからこそ、私は障害という括りの中ではなく、私自身として過ごせたのだ。その一方で、学校の外では障害の中で自身が括られることに、違和感を感じることも多かった。例えば登校中、

「車いすなのに偉いわね。」
と声をかけられたり、賞を取ったときも
「車いすなのにすごいわね。」

と言われることがあった。本当に何気ない一言だった。しかし私は私が私として評価されないことや、障害の中で括られていることがとても悲しかったのだと思う。そんな時、一緒に登校していた友達が私に言ってくれた。

「夢ちゃんは、夢ちゃんだよ。」

これもまた何気ない一言だった。しかし私はこの言葉が嬉しくてたまらなかった。思えばいつも周りのクラスメイトや先生は、私に障害があるからではなく、どうしたら私が参加できるのかを考えてくれたように思う。

私にはそんな経験を通して考えるようになったことがある。どうしたら障害のある人が、障害の中で括られずその人らしく生きられるのか。きつとその答えのひとつは一緒に過ごす時間にあると、私は思っている。障害と聞くと難しく考える人も多いかもしれない。しかし一緒に時間を過ごす時、障害はその人の一要素でしかないことに気づくがあると思う。私の学校生活はまさにこれだった。そんな一緒に過ごすうちに生まれる気づきが、とても大切なものなのだ。私は思う。一番怖いことは、知らないことだ。知らないから、関わったことがないから、分からないから。そういうものに対して、人はつい難しく考えてしまう。だから幼少期の内から、障害に限らず色々な人がいる中で、生活を、時間を共有することはとても大切なことだと私は思うのだ。そこから生まれるたくさん気づきが、社会を良い方向に動かしていくはずだ。

私はそんな時間を共有できるお店で、現在ボランティアスタッフとして働いている。そのお店とは車いすユーザー

の横山博則さんが店長を務める、「駄菓子屋横さんち」だ。

横さんちでは現在十一人の障害者が働いている。私はこの横さんちのボランティアを通して、多くの気づきをもたらした。横さんちは障害というテーマをもつ一方で、お店を利用する人は障害や福祉に関わる人たちに限定されていない。障害や年齢や地域を限定せず、誰でも来てもらえるお店。それが「横さんち」だ。福祉の場ではなく、駄菓子屋さんであるからこそ、様々な人が訪れる。そしてそんな空間での自然な交流の中で、ふとした瞬間にたくさん気づきが生まれていると、私は思う。例えば私がレジをしていると、いつもお店に来てくれる小学生は、自然と袋詰めを手伝ってくれる。買い物という日常生活の中で障害を持つスタッフと交流することで、困りごとや困りごとへの工夫の仕方その小学生は当たり前、知ってくれている。日常生活の中に当たり前にある「駄菓子屋」という空間だからこそ、そこで得る気づきは偶然得たものになる。何かしらの気づきや学びを得ようという意識のもとで得た学びも、当然大切な学びではあるが、ふとした瞬間に気付くことができた学びはより一層、その人の考え方や価値観へと繋がると私は思うのだ。私はこんな横さんちのような、自然と同じ時間を共有するなかでの気づきを生み出せる場が、もっと増えていけばいいなと感じている。知ることは、お互いを理解し、自分にできることを見つけてきつかけにな

る。そして、自分の経験の中から得られた一人一人の気づきが、いずれ社会を変えるきっかけとなっていくのだろう。

日常生活のありふれた時間の中で人と出会い、話し、気づき、学ぶことで、少しずつ変化が生まれる当たり前があればもっと、誰もが暮らしやすい社会になっていくと思う。私は当事者として、そんな自然な心のふれあいや気づきがうまれる場をつくっていきたい。そんな心のふれあいや気づきのその先にはきつと、誰もが自分らしく生きられる社会があるはずだ。

闘たたかい

牧まき田た恵めぐ実み

私は精神障害者である。しかし障害者だからと言って恥ずかしさを感じることはない。なぜか？必死に闘っているからである、病氣と。

病氣の症状がでたのはいきなりだった。通学電車から降りると私がどこにいるのか、どうしたら学校に行けるのかわからなくなり、すぐに家族に「助けて！」と電話した。父が迎えに来てくれてパニックで動けなくなっている私の手を引いて家まで連れて帰ってくれた。その後もいつの間にか学校を出たものの自分がどこにいるのかわからなくなり泣いている私を当時担任だった先生が迎えに来てくださったこともある。そのようなことが度々起きたため学校の先生方も心配してくださり大きな病院での検査を勧められた。検査を受けに行くと、すぐに入院を勧められ入院することになった。そして検査の結果はおそらく統合失調症ではないかとのことだった。

「統合失調症」それは百人に一人はかかると言われる病。

「者手帳持ってみない？」というものだった。提案されて気づいた。私は障害者なのだ。私は障害者。だから今までそんなに辛い思いをしてきたのだ。そう考えると合点がいった。だから障害者手帳を持つことを決めた。手帳を持つことで自分自身の中でまだくすぶっている「障害者」である自分ときちんと向き合い認めることができると思っただけからだ。

デイケアという心のリハビリ施設にも通い始めた。そこには様々な心の病氣を持つ人がたくさんおられた。そしてそこでは世間話だけでなく「今こんな症状が出て困っているのです」と家族以外の方とも病氣で困っていることに対しお互い遠慮なく助けを求められることができた。自分の中でそのような助けを求められるようになったのも小さな前進だと思っている。

以前友人に「精神科」に通っていると言うと、「お前廃人になっただな」と言われた。悔しかった。私は必死に病氣と闘っているのに、そんな私を「廃人」という一言でまるでダメな人間。一人では何もできない人間だとレッテルを貼られたように感じた。それからは一生懸命病氣と闘ってはいるものの周りには病氣になったことは隠すようになった。そしてこれ以上私を傷つけたくないという母は私の交友関係について、とても慎重になり、同級生などと会うのも止められるようになった。そんな中一人だけ「家に呼んだら？」

この日から私と病氣との闘いが始まった。私の症状は様々で、いきなり男の人の声で「死んでしまえ！」と幻聴が聞こえてきたと思えば次は味覚と嗅覚がおかしくなり更に妄想も加わり「食べ物の中に毒が入っている！」と必死に看護師さんに「食べたらだめだ！」と訴え、その後しばらくは食事をとることができなくなり、点滴のみの生活となった。また、入院中にいつもは病室で寝ているはずなのに朝起きたら保護室にいて、「なんで私この部屋にいるのですか？」と看護師さんに聞くと、「本当に覚えていない？昨日の夜中にいきなり暴れ始めたのよ」と言われとても驚いた。そんな目に見えず記憶もない病氣と闘ってきた。とはいえこれは私一人の闘いではなかった。私には家族がいた。私を元氣付けようと焼き肉屋へ連れて行ってくれた。私を笑顔にしようと旅行に連れて行ってくれた。そんな家族と過ごすうちに体調も安定し始め、家族以外の人と話す余裕が出てきた。そんな時、母から一つ提案された。「障害

と母が勧めてくれた友人がいた。彼女を障害者になつてから初めて家に呼んだことは覚えていて。だが何を話したのかは定かではない。しかし彼女の言ったたった一言。「めぐ、すごく頑張ってるね。」この一言に涙が止まらなかった。「大丈夫？」「辛そうだね」よりも何十倍も救われた。その友人とは今でも時々会って話をしたり、毎年桜の季節はお花見へ行ったりしている。「廃人だな」そして「頑張ってるね」どれもたった一言。その一言が人の心をこんなにも大きく動かすのだ。

私は今一人暮らしをしている。と言っても望んで一人暮らしを始めたのではない。父と母が癌で亡くなってしまったからだ。八年前父は家族やヘルパーさん、訪問看護師さんと力を合わせて家で闘病生活を送り家で息を引き取った。そして三年前母はコロナウイルスが流行りだしたころに何か月も入院し、コロナウイルス対策で面会も制限され、会いたくても会えない時期があった。母は癌が進行し、先が長くないとわかってから障害を持っていて一人では生きて行けないだろうという私とどう心中しようか本気で考えたそう。でも、母が入院している間に毎日一つずつ家事を覚えていく私を知って「めぐがここまでできる子になったとは知らなかったわ。少し安心。」と心中の話は流れたそう。でもやはり母の中で心配は消えなかったらしく入院中に書いたのだろう。母は涙が止まらない程元氣が

出ることを書いた素敵なメモを残していつてくれた。その中に一つ、私の心を奮い立たせる一言が書いてあった。

「めぐ、ひとりだけど、ひとりぼっちじゃないから！」

その通りだ。毎日一人暮らしは寂しいと言っていた私には大好きな姉がいる。私には笑顔がかわいい友人がいる。私にはいろんな相談にのってくださるダイケアの皆さんがいる。他にも主治医の先生やカウンセラーの先生など。こんなにも多くの人に支えられながら今私は障害と闘っている。こんなにも心強くうれしいことがあるのか。だから負けない。逃げない。正々堂々と病気とそして障害者として自分自身と向き合おう。支えてくださる人たちに恥ずぬよう。

そして最後にこれだけは忘れないでほしい。障害者がなんだ。健常者がなんだ。みんな闘いながら生きているのだ。仕事や病気、けが。そして人生とともに。